

合同 No. 492

「わたしはわたしではない」

東浦和教会牧師

和泉 美和子



「イエスは御自分の身に起こることを何もかも知っておられ、進み出て、『だれを捜しているのか』と言われた。彼らが『ナザレのイエスだ』と答えると、イエスは、『わたしである』と言われた。イエスを裏切ろうとしていたユダも彼らと一緒にいた。イエスが『わたしである』と言われたとき、彼らは後ずさりして、地に倒れた」（ヨハネによる福音書18章4節～6節）。

今年4月20日にイースターを迎えます。今は受難節の最中ですから、主の受難を覚えて聖書を読むことも多いと思います。主イエスの受難の記事は、四つの福音書全てが語っています。読み比べてみると、ヨハネによる福音書は、主が捕まる場面の描き方が他の福音書と異なることに気が付きます。すでに裏切りの行動に出ている12弟子の一人ユダが、人々を連れて、なじみの場所、ゲツセマネの園へとやってきます。ユダが近づき、接吻をした相手がイエスだという合図を決めていた、これが三福音書の記述です。しかし、ヨハネでは、ユダはその合図をしません。主イエス自らが、先頭に立って進み出、「だれを捜しているのか」と人々にたずねます。「ナザレのイエスだ」という答えに対し、「わたしである」とイエスご自身が宣言されるのです。ここには逮捕される悲壮感はなく、むしろ、堂々と立ち、神のご計画に邁進していかれる主の覚悟が際立っています。その証拠に「わたしである」の言葉に、人々は圧倒されて、その場に倒れてしまいました。

これまで主イエスは「わたしは〇〇である」ということを繰り返し語ってこられました。「命のパン」（6章35節）、「世の光」（8章12節）、「良い羊飼い」（10章11節）、「復活であり、命」（11章

25節）、「道であり真理であり、命」（14章8節）、「ぶどうの木」（15章5節）、多くの豊かな神性が並びます。その頂点ともいえる「わたしである」という宣言は、ギリシャ語では「エゴ・エイミ」、「わたしはある」と訳されてもいる言葉です。旧約聖書では、モーセにあらわれた主なる神が「わたしはある。わたしはあるというものだ」とご自身を現わされた名につながります。その名を、主イエスがはっきりと宣言され、神の存在が現わされました。神がここにおられる、という圧倒的な力によって、人々は倒されてしまったのです。

主イエスが捕まり、その後をついていった弟子のペトロが三度主を否定する記事もすべての福音書が描いていますが、ヨハネでは、彼が弟子ではないかと聞かれたときに、「違う」（18章18、25節）と答えます。これは直訳すると「わたしはわたしではない」という言葉です。「わたしである」の否定形です。主イエスの「わたしである」とペトロの「わたしはわたしではない」が対比されています。ペトロは弟子ではないと否定するだけでなく、自分自身をも否定し、そのことに愕然とした彼はもはや、涙を流すこともできませんでした。

空っぽの抜け殻状態のペトロは、復活の主に再会したとき、主に「わたしを愛しているか」と三度聞かれます。抜け殻になる前の彼なら「もちろんです、命にかけて愛しています」と自信満々に答えたでしょう。しかし、彼は「主よ、あなたをご存知です」と主にその心を明け渡した答え方をします。三度とも。あのとき、恐れから「わたしはわたしではない」と否定した言葉は、このとき、「わたしはわたしではない。あなたのものです」という新しい信仰告白となったのです。

「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです」（ガラテヤの信徒への手紙2章20節）。

復活の主に出会い、「キリストがわたしの内に生きる」新しいわたし。この信仰告白がわたしを建て上げるのです。